

ジャワ村落社会のテレビ視聴者

——メディア人類学の試み——

小 池 誠*

はじめに

- 1 調査地の概要
- 2 教育水準の向上
- 3 マス・メディアの浸透
- 4 世代によるテレビ視聴の違い
- 5 ニュースの受容
- 6 マス・メディアと社会変化
- 7 シネトロンにハマる娘たち

結び

は じ め に

現代の人類学者がフィールドで出会う様々な出来事のなかで、その存在（そして時として住民にとって存在の大きさ）に気づいても、民族誌を書く上ではほとんど無視してきたのはテレビであろう。居住地のなかではテレビはもとより電気がない生活をしている人々でも、かれらが時おり訪ねる市場などがある町でテレビを見ることはあり、世界中でテレビをまったく見たことがない人は本当に少なくなっている。一部の人類学者が1990年代に入って、やっと各自のフィールドにおけるメディアの存在に目を向け、研究対象として取り上げるようになってきた¹⁾。もちろん日本と欧米のメディアを対象とした調査研究は、マス・コミュニケーション研究や社会学の分野で以前からさかんに行われてきた。しかし、地域社会でのフィールド・ワークに基

*本学文学部

キーワード：インドネシア、ジャワ、テレビ、シネトロン、メディア人類学

づいたメディア研究は、メディア人類学（media anthropology または anthropology of media）として、ようやく近年になって欧米の人類学界で始まったものである [Spitulnik 1993]。日本においては、映像人類学（visual anthropology）という研究分野で民族誌映画の研究 [たとえば、伊藤・港編 1999] はかねてより行われているが、地域社会におけるメディアの受容を対象とした人類学的研究は、私の知る限りまだ試みられていない。人類学のなかでメディアをどのように研究するか、研究の枠組みと方法論についてはまだまだ検討すべき点が数多くあり、本研究もまだ試行的なものに留まっている。しかし、人類学者が現代社会、とくに急激な社会変動が起きている地域社会を研究する上で、「伝統的な」地域の慣習とテレビを代表とする現代的なメディアの共存は、無視できない重要な問題である。

本稿ではマス・メディアのなかで、とくにテレビに焦点を当て、インドネシア・ジャワ島中部にある農村社会で、住民がいかなるテレビ番組を見て、どのような情報を得ているかまず明らかにしたい。次に、テレビ視聴が彼らの生活世界においてどのような意味を持つことなのか考えてみたい。テレビが農村社会に与えた影響についてインドネシアでの先行研究はまだ少ないが²⁾、インドについて Johnson [2000] が興味深い報告をしている。ただし、ジョンソンの研究はテレビを中心に社会変化を分析しようとする傾向が強い。テレビが社会にどんな影響を与えたか、または与えていないかはマスコミ研究で様々な調査研究と理論的な議論が展開されている大問題である [たとえば McQuail 2000 参照]。本稿において、テレビだけを取り出して、それがいかなる影響を農村社会に与えたかという問題は設定していない。テレビに象徴される、またはテレビを重要な構成要素の一部とする「近代化」が村落社会で進展していくなかで、何が変わったか、また何が変わらなかったかを問題にすべきだと考えている。ただし、その変化はテレビ視聴にもっともよく表れていて、そこにテレビに注目すべき意義がある。分析に際しては、テレビ視聴と「近代化」との関係を考える上で、世代と学歴（それと関連するインドネシア語能力）を重要な指標の一つとして検討したいと考えている。

1 調査地の概要

本稿で取り上げる調査地は、ジョクジャカルタ特別区バントウル県東部に位置するプルウォサリ村（仮称）である³⁾。バントウル県は一般に人口密度の高い稲作農業地帯として知られているが、調査地はオパック川の東に位置し農業用水の便が悪く、雨期のみの稲作と、乾期のタバコ栽培に依存している地域である。この地方の行政と経済の中心地であるジョクジャカルタから約20kmと比較的に近いが、この村はかつて交通の便の悪い僻地であった。1990年になって村の近くを流れる川に橋が架かって四輪車が通行できるようになり、交通がはるかに便利になった。1988年に電気が入り、現在は約80%の世帯で電気が使用されている。近年になってマス・メディアとの接触、および都市部とのコミュニケーションにおいて急激な変化が起こり、その点でマス・メディアの浸透状況に関する調査地として興味深い村である。村の統計（Data Monografi Tahun: 1998）によると、人口は4111人で世帯数は891である。この村はバントウル県のなかでは開発が遅れ貧しい地域であり、政府から「貧困村」（Inpres Desa Tertinggal=IDT）に指定され、特別な援助を受けている。

村を住民の移動という観点から見ると、住民の固定性の高さと、その正反対に顕著な流動性という二つの面をもっている。この村の住民は、結婚を機に村に入ってくる人を除けば、ほとんど村で生まれた人々である。村の中では集落⁴⁾を単位として、何らかの親族関係で結ばれた村人の間で、調和を重要視した濃密な対面的なコミュニケーションが繰り広げられている。毎日仕事のために村の外に出かけることはあっても、彼らの生活の基盤は村におかれている。一方、住民の流動性を調べると、村外に出て行った住民の割合は高く⁵⁾、閉鎖的な地域社会ではまったくなく国内外の政治経済的な動向に密接に結びつけられた村社会であることが分かる。

調査においては、プルウォサリ村にある8地区（dusun）のなかで、3地区（G地区・P地区・M地区）を取り上げ、さらにそれぞれの地区から一つ

の隣組 (RT=Rukun Tetangga), すなわち G 2・P 4・M 3 を選んで, 全戸調査を実施した⁶⁾。調査戸数 (1999年) は, G 2 が19戸, P 4 が32戸, M 3 が30戸である。これら3つの地域は, 社会文化的に見て多様性に富み, 調査の目的上ふさわしいと考えて, インテンシブな調査を実施した。簡単にそれぞれの地域の特徴をまとめれば, G 地区はこの村のなかでもっとも西に位置し, ジョクジャカルタから向かうと, 村の入り口に当たる地域であり, 家屋の構えなど外見は村というよりも町に近い地域である。そのため, G 2 は3地域のなかでもっとも近代的であるといえる。住人の職業構成も農民以外に公務員や元公務員 (年金生活者) を含んでいて, 比較的に多様であり, 同時に経済的にも豊かである。この地区だけを見ていると, この村が「貧困村」に指定されていることが不思議に思えるが, M 3 を訪れると, それも納得させられる。G 2 とは対照的に, M 3 はもっとも貧しい集落である。耕地を所有している住民は少なく, 家具作りなど賃労働者として働き, 生活費を稼いでいる。P 4 は, 社会経済的に見て上記2地域の間位置し, 農民・農業労働者と公務員 (教員) の他に, 家内手工業 (パンケーキ作り) を営んでいる世帯もある。この村の住民は統計上イスラム教徒が100%であるが, とくにこの地域は敬虔なイスラム教徒が多く住んでいて, ナフダトゥル・ウラマ (Nahdatul Ulama=NU)⁷⁾の勢力が強い地域として知られている。

2 教育水準の向上

調査地におけるマス・メディアとの接触と受容の状況について触れる前に, 教育水準に関して調査結果をまとめてみたい⁸⁾。基本的にインドネシア語を使用言語とする国家レベルのマス・メディアとの接触を考える時, 受け手のインドネシア語能力は不可欠な要素であるし, またインドネシア語の会話能力と学歴は明らかな相関関係を有するからである。

表1は調査地全体の教育水準について年齢層との相関を調べたものである。対象となった308人は, インフォーマントとその配偶者, およびその子供 (調査村から流出した者も含む) である。この表から第一に分かることは,

ジャワ村落社会のテレビ視聴者

表1 プルウォサリ村の教育水準（20歳以上，1999年）

	年令層							合計
学歴	20 －29	30 －39	40 －49	50 －59	60 －69	70 －79	80－	男性 女性／男女計
未就学	0 1	0 8	1 7	2 4	4 9	0 4	0 4	7 37／44
小学校中退	6 1	6 5	5 5	5 4	0 0	3 0	1 0	26 15／41
小学校卒	11 15	9 21	12 16	6 6	4 0	2 0	0 0	44 58／102
中学校卒	7 8	2 5	1 2	0 0	2 0	0 0	0 0	12 15／27
高校在学	0 1	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 1／1
高校卒	18 20	18 7	6 1	2 0	2 0	0 0	0 0	46 28／74
短大・大学 中退・在学	4 2	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	4 2／6
短大・大学卒	3 2	2 2	1 1	2 0	0 0	0 0	0 0	8 5／13
合計 男性	49	37	26	17	12	5	1	147
女性	50	48	32	14	9	4	4	161
男女計	99	85	58	31	21	9	5	308

60歳以上，すなわちインドネシア独立前か，独立直後に小学校に就学した年齢層で，未就学（つまり全く学校に通った経験がない人）が目立つということである。逆に言えば，この年代で小学校卒以上の学歴を有する男性が10人いるが，彼らは例外的な存在であり，すべて村落の基準でいえばエリート層・富裕層の出身であった。とくに，70歳以上で小学校（オランダ統治時代の3年制の村落学校）を卒業した村民は，村役人など村落エリートを占めていた。また，60歳台で中学校卒が2名，高校卒が2名いるが，独立直後

の時代に中学校卒以上の学歴を持っているのも、エリートの証である。30歳以上では教育水準のジェンダー差は顕著な現象であり、女性の未就学者が目立つ。これは女性に学校教育は無用であるという親（多くは独立前に生まれた世代）の教育観を反映している。ただし、現在小学校に通っている世代も含めて29歳以下では男女差はほとんど認められなくなっている。

40歳から59歳までの年齢層（合計89人）では、小学校卒以上がこの年齢層の62.9%（56人）に達していて、小学校を卒業するのが珍しくなくなってきた。この年代では9人の高校卒がいるし、さらに4人の大学卒（短大卒を含む）まで誕生している。ただし、この世代で、大学に行くことは当時の村の基準では特別なことであった。次に、20歳から39歳までの年齢層（184人）を見ると、教育水準の向上が顕著である。中学校卒以上が、54.9%（101人）と半数を越え、さらに高校卒以上も42.4%（78人）と半数に近づいている。この村には中学校も高校もなく、生徒のほとんどは自転車に乗って毎朝学校に通っている。この年齢層は70年代以降のスハルト大統領による「新体制」（Orde Baru）下で学校教育を受けた世代であり、この時代に経済発展とともにインドネシアにおける学校教育の量的拡大が進んだのである [cf. Oey-Gardiner 1997]。

次に教育水準に関する3つの調査地域の格差について調べてみよう（表2・表3・表4参照）。G2の特徴は、高学歴が目立つことである。すでに10人の大学（短大を含む）在学以上の学歴を有する者（全体の11.9%）がいて、また20から39歳までの年齢層（46人）で、71.7%が高校卒以上の学歴を持っている。この地域の経済的な豊かさを示す数字である。G2と対照的に、M3はこれまでに大学に入学した者は1人しかなく、現時点では高校卒が最高学歴である（表4）。小学校卒業以上の学歴をもつ住民の割合も、56.0%と他の調査地域と比べて明らかに低い。これは親の経済状況を反映していると考えられる。P4は中学校卒と高校卒以上の割合がG2と比べて低いが、M3よりも高い教育水準を示している。この地域は、経済状況の割には教育水準が高い地域である。すでに述べたようにP4には敬虔なイスラム教徒が多

ジャワ村落社会のテレビ視聴者

く、イスラム系の学校に通っている生徒の数が目立つ。

表2 プルウォサリ村の教育水準（G 2 隣組）（10歳以上，1999年）

	男	%	女	%	男女計	%
小卒以上	35	79.5	31	77.5	66	78.6
中卒以上	29	65.9	22	55.0	51	60.7
高卒以上	24	54.5	16	40.0	40	47.6
大学在学以上 （含む短大）	8	18.2	2	5.0	10	11.9
総数	44		40		84	

表3 プルウォサリ村の教育水準（P 4 隣組）（10歳以上，1999年）

	男	%	女	%	男女計	%
小卒以上	70	85.4	75	80.6	145	82.9
中卒以上	46	56.1	37	39.8	83	47.4
高卒以上	32	39.0	21	22.6	53	30.3
大学在学以上 （含む短大）	6	7.3	5	5.4	11	6.3
総数	82		93		175	

表4 プルウォサリ村の教育水準（M 3 隣組）（10歳以上，1999年）

	男	%	女	%	男女計	%
小卒以上	38	62.3	32	50.0	70	56.0
中卒以上	14	23.0	8	12.5	22	17.6
高卒以上	5	8.2	1	1.6	6	4.8
大学在学以上 （含む短大）	0	0	1	1.6	1	0.8
総数	61		64		125	

表5 プルウォサリ村の教育水準(調査地全体)(10歳以上, 1999年)

	男	%	女	%	男女計	%
小卒以上	143	76.5	138	70.1	281	73.2
中卒以上	89	47.6	67	34.0	156	40.6
高卒以上	61	32.6	38	19.3	99	25.8
大学在学以上 (含む短大)	14	7.5	8	4.1	22	5.7
総数	187		197		384	

表5には、プルウォサリ村の調査地域全体の教育水準が示されている。このデータを、同年という訳ではないが、手元にある国勢調査の結果(1995年)と比較してみよう[Biro Pusat Statistik 1995a, 1995b]。この調査地は、小学校卒以上の学歴の割合(73.2%)についてインドネシア全体の平均(88.46%)を下回っているだけでなく、この村を含むジョクジャカルタ特別区の平均(85.20%)よりも低い。この村における高年齢層の学歴の低さ(小学校卒の少なさ)を反映していると考えられる。それに対して、1970年代に入ってからこの村で急激に高校進学者が増えた結果、調査地の高校卒以上の割合(25.8%)は、インドネシア全体の平均(15.29%)をはるかに上回るだけでなく、ジョクジャカルタ特別区の平均(25.04%)も上回っている。

3 マス・メディアの浸透

マス・メディアのなかでもっとも長い歴史をもつ新聞は、この村が都市部から離れているため、その定期購読者の数はごくわずかである。ほんの数世帯で新聞(Kedaulatan Rakyat という地方紙)を購読しているだけである。メディアとしてもっとも普及しているのが、ラジオである。調査地のほぼ全所帯がラジオを所有している。ラジオの普及度は高いが、テレビがこの村に普及してからは、ラジオを聴くことは情報を得るという目的でも単なる娯楽のためでも以前のような人気はなくなっている。朝方とか夜寝る前に、とく

ジャワ村落社会のテレビ視聴者

に聴くということなしにラジオをつけているという家庭があった。

今日、マス・メディアとしてもっとも重要なのは、テレビである。1962年に放送を開始したインドネシア共和国テレビ（TVRI）は初の民放が開局するまで27年間インドネシアのテレビ放送を独占してきた。TVRIの使命は、①国家統一と統合の推進、②国家開発の推進、③政治的安定の推進であった。TVRIは巨大な多民族国家を一つにまとめあげるために大きな役割を果たし、国民文化の形成に寄与した。しかし、1989年にはじめての民放RCTIが開局し、1990年にSCTV、1991年にTPI（インドネシア教育テレビ）、1993年にANTeve、1995年にIndosiarと、多チャンネル化が急速に進展した⁹⁾。ごく一部の富裕な家庭では自家発電によってテレビを見ていたが、1988年からこの村では電気が使用できるようになり、その後、急速にテレビが普及した¹⁰⁾。つまり、インドネシアの多局化と軌を一にして、ブルウォサリ村でもテレビが普及したことになる。この村の地理的条件のため、電波の受信状況は都市部と比べて悪く（また、アンテナの不備のため）、6つのテレビ局のなかでTVRI、TPI、ANTeveの3局を受信できない家庭が多く（特別にアンテナを立てればTVRIは映る）、他の3局、つまりRCTIとSCTV、Indosiarをもっぱら見ている家庭がほとんどである。

次に、調査地におけるテレビの所有世帯の割合について見てみよう（表6参照）。調査対象の77世帯のなかで45.5%が視聴可能なテレビを所有している（カラーテレビについては19.5%）。教育水準で明らかになったのと同様に、ここでも3地域間の格差が明白に認められる。G2とM3を比べると、テレビ所有世帯の比率は、3倍となっている。ただし、後で述べるように、テレビをもっていない人も近隣の家でテレビを見ることがよくあるので、テレビ受信機の有無がそのままテレビの視聴状況を示すものではない。

4 世代によるテレビ視聴の違い

テレビ視聴の頻度について調査結果（1998年実施）からまとめてみよう（表7参照）。インフォーマントの総数は98人で、各世帯の世帯主またはそ

表6 テレビ所有世帯の割合（1998年）

テレビ受信機の有無	G 2 隣組	P 4 隣組	M 3 隣組	3 地域計
テレビ受信機 ()内はカラーテレビ	14(10) 70.0(50.0)	14(1) 51.9(3.7)	7(4) 23.3(13.3)	35(15) 45.5(19.5)%
故障中のテレビ	1 5.0	1 3.7	3 10.0	5 6.5%
テレビのない世帯	5 25.0	12 44.4	20 66.7	37 48.1%
合計世帯数	20	27	30	77

下段は %。

表7 テレビ視聴の頻度（年齢層別，1998年）

テレビ視聴の頻度	年齢層						合計
	16-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-	
まったく見ない	0 0	1(1) 4.5	1(1) 5.9	2(2) 11.1	1(1) 7.1	4(4) 21.1	9(9) 9.2%
ほとんど見ない	0 0	0 0	0 0	1(0) 5.6	0 0	2(1) 10.5	3(1) 3.1%
時々見る (週に数回)	1(1) 12.5	4(4) 18.2	8(6) 47.1	4(3) 22.2	4(3) 28.6	6(5) 31.6	27(22) 27.6%
ほぼ毎日見る (1日2時間未満)	1(1) 12.5	12(5) 54.5	2(1) 11.8	6(2) 33.3	5(2) 35.7	3(1) 15.8	29(12) 29.6%
毎日見る (1日2時間以上4時間未満)	4(2) 50.0	3(1) 13.6	6(1) 35.3	4(0) 22.2	4(0) 28.6	4(0) 21.1	25(4) 25.5%
毎日見る (4時間以上)	2(0) 25.0	2(1) 9.1	0 0	1(0) 5.6	0 0	0 0	5(1) 5.1%
合計 %	8(4) 100%	22(12) 100%	17(9) 100%	18(7) 100%	14(6) 100%	19(11) 100%	98(49) 100%

() 内はテレビを持っていない世帯の成員，下段は %。

の配偶者，およびその子供（16歳以上）を対象として，メディアとの接触などについて質問票を用いたインタビュー調査を行った。調査対象の数が少ないので，統計的に確実なことを言えないが，ある程度傾向を把握することは

ジャワ村落社会のテレビ視聴者

可能である。興味深いことに、テレビを持っていない世帯の成員でも、視聴時間に関わらずテレビをほぼ毎日見ると答えたものが、17人もいるのである。家にテレビがない者でも、テレビを見るのが習慣になっている。ここでより重要なのは、年齢層による違いである。60歳以上の高齢層には、テレビを持っていないものが多く、また、たとえ家にテレビがあったとしても、テレビを視聴する時間が若い年齢層と比べて短い傾向にある。60歳以上では、時々見ると答えたものの割合がもっとも高くなっている（31.6%）。それと対照に、20歳代ではほぼ毎日見る者が半数を越えている。さらに、10歳代になると、テレビを毎日見る（2時間以上4時間未満）と答えたものが、50%もいるのである。さらに家にテレビがなくてもテレビを毎日見ているものが2人もいるのである。テレビの視聴については、年齢による差が顕著に表れているといえる。

テレビ視聴の中身を見ていくことにしよう。どんな番組をよく見るかという質問に対する答えにも年齢層による違いが明確になっている。60歳以上（とくに男性）では、ワヤン（wayang、影絵芝居）¹¹⁾とクトプラ（kethoprak、大衆演劇の一種）¹²⁾をよく見ると答えるものがもっとも多いのである（21人中、11人）。また、50歳以上でもワヤンとクトプラが人気である。ともにジャワ語で演じられる芸能であり、インドネシア語が不得意で（すなわち学校教育を受けてなく）、ジャワ語を日常使用している高齢層の村人にとって、ジャワ語の芸能が一番聞きやすいのである。ただし、高齢層でも小学校教育を受けたものは、ニュースをよく見ると答える傾向がある。クトプラの人気は高齢層以外でも高く、全年齢層を通して、31人がクトプラをよく見ると答えている。続いて、2位は「リプタン6 Liputan 6」（SCTV 毎日午後6:00～7:00）というニュース番組である。

壮年層（40～59歳）では男女差が顕著に認められる。男性では高齢層と同様にジャワの民族芸能、特にクトプラをよく見ると答える者が多い。また、ニュース番組の人気が高く、それは世帯主の男性（30～59歳）がテレビ購入の理由として「情報を得るため untuk dapat informasi」を挙げていることが

らも明らかである。続いて、ボクシングなどスポーツ番組も人気がある。一方、女性ではテレビドラマの人気が高いのである。これは女性では全年齢層を通して当てはまることであり、48人の女性のなかで24人がテレビドラマをよく見ると答えている。民放ではほぼ毎日、プライム・タイム（7時半から9時台）に連続テレビドラマ（インドネシア語ではシネトロン sinetron¹³⁾を放送している。いわゆるメロドラマ（英語でいう soap opera）がその大半を占めている。その代表的なドラマが「賞賛されて Tersanjung」（Indosiar 金曜日夜7:30～8:30）であり、多くのドラマのなかで圧倒的な人気であった（15人がよく見る番組に挙げている）。「賞賛されて」は、豪邸を舞台に欧米風な顔立ちをした美男美女が登場するシネトロンの典型ともいえるドラマである。夫婦の愛、親子の絆、主人公を陥れようと敵役が仕掛ける様々な落とし穴など、女性視聴者を対象としたメロドラマに欠かせない要素がすべて揃っている。このドラマのなかで描かれている生活や人物設定は農村に住む視聴者にとってまったくかけ離れたものであり、それが都市部の住民だけでなく農村部にすむ女性にも非常に人気があるというのは、興味を引く（7章参照）。

若年層（20～39歳）でも、壮年層と同じようなジェンダー差が認められる。女性にはドラマの人気が高いのにたいし、男性ではニュース番組をよく見る人が多い。上の世代と比べて、ジャワの芸能を見る者が少なくなり、その代わりに20歳では映画（外国映画も含めて）の人気が高くなっている。

5 ニュースの受容——11人の視聴者

国内の重要な出来事に関する情報がどのように村の住民に伝わったか、とくにテレビ・ニュースがどの程度、情報の獲得に役割を果たしているか、P4に住む11人のインフォーマントを取り上げて考えてみたい。高齢層・壮年層・若年層と3つに分け、それぞれの年齢層ごとに平均的（最頻値の意味）な教育水準を持つインフォーマントを選んでいる。ここでP4を考察の対象としているのは、すでに述べたように、調査地全体のなかでP4が中間的な

状況にあるからである。

この調査を実施したのは1998年8月（年齢・家族構成等はこの調査時点のもの）であり、これはインドネシアの現代史にとって特別な意味をもつ時期である。同年5月に30年以上に及ぶ独裁的なスハルト政権が崩壊し、当時の副大統領だったハビビが第3代インドネシア大統領に就任したのである。5月21日のスハルト辞任と、その前の10日間位に首都ジャカルタで起きた騒乱事件（スハルト辞任を求める学生デモと、それに対する国軍による発砲事件、さらに華人が多く住む地域での暴動・放火事件）という大事件が、マス・メディアを通してどのように村にまで伝わったかは、当時のメディアの影響力を考える上で、非常に興味深い問題である。

（1）高齢男性（60歳以上、小学校中退以下の学歴）

（1-1）カルトバウィロ¹⁴⁾

70歳の農民で、妻と中学在学中の末娘と3人で暮らしている。また、屋敷地内に息子夫婦が別の世帯を営んでいる。小学校を2年で中退していて、ジャワ語しかできない。家にテレビはなく、近くの甥の家でごくたまにテレビ番組（ワヤンとクトブラ）を見るだけである。ジャカルタの騒乱とスハルト辞任については、ラジオのニュースで知った子供から伝え聞いた。

（1-2）マルディ

60歳の農民で、妻と、長男夫婦、24歳の息子と生活している。小学校3年で中退した（ただし、インドネシア語でインタビュー可能）。家にテレビはなく、テレビはまったく見ない。ただし、長男が買ったラジオがあり、ワヤンとクトブラの放送を聴くのが好きである。ジャカルタの騒乱については、隣組の会合（Pertemuan RT）で知人から聞いて知っている。また、スハルトの辞任は知らなかったと答えていた。しかし、ハビビ大統領の名前は、同じく隣組の会合で聞いていて知っていたと、相互に矛盾する回答をしていた。

（2）高齢女性（60歳以上、未就学）

（2-1）サティラー

80歳で、夫は死去し、また子供もすでに独立しているので、近くに住む子

供や孫の面倒を受けながら単身で生活している。小学校に通ったことがなく、ジャワ語しか理解できない。ラジオが家にあり、毎週金曜日の宗教講話の放送を聴いている。家にテレビはないが、近所に住む子供の家で夜よくテレビを見ている。とはいえ、テレビ番組を見ていても理解できるのはクトプラだけである。ジャカルタの騒乱とスハルト辞任、第3代大統領について、まったく聞いたことがないと答えていた。

(2-2) アミナー

75歳で、夫は死去し、また子供もすでに家を離れているので単身で生活している（夫が警察官だったので年金を貰っている）。小学校には通ったことがないが、インドネシア語で受け答えができる。家にテレビはなく、近所でテレビ番組を見ることもない。10年位前に買ったラジオがあり、イスラム宗教講話（pengajian）とワヤンの放送を時々聴くだけである。（2-1）サティラーと同様に、ジャカルタの騒乱とスハルト辞任について全く聞いたことがなく、また、ハビビ大統領の名前も知らなかった。

(3) 壮年男性（40～59歳，小学校卒業以上の学歴）

(3-1) ハルソノ

50歳で、高校を卒業し、近くのイスラム小学校（Madrasah）で宗教教師をしている。長男は結婚し他の地区に住んでいて、妻の他、未婚の次男・三男と計4人で生活している。小学校に勤めている関係上、学校で新聞（ジョクジャカルタの地方紙，Kedaulatan Rakyat）とイスラム関係の雑誌（Bakti）も読んでいる。4年前に買った白黒テレビ（Rp 115,000¹⁵⁾があり、1日に最低3時間はテレビを見ている（ただし、このテレビは調査時点で故障中であり近所でテレビを見ていた）。ニュース番組と娯楽番組（とくにクトプラとクイズ）をよく見ている。ニュース番組としては、「リプタン6」を見ることが多い。当然、ジャカルタの騒乱とスハルト辞任のニュースもテレビで見ているし、また、ラジオでも聴いている。また、スハルト辞任については、「ともに喜びたい saya ikut gembira」と答えていた。

(3-2) スラメット

ジャワ村落社会のテレビ視聴者

42歳の農民で、小学校を卒業している。妻と3人の子供と暮らしている。この調査地域の隣組長（Ketua RT）の地位にある。5年前に買った中古の白黒テレビ（Rp 95,000）が家にある。アンテナはTVRIしか映らないようにしていて、TVRIのニュース番組、とくに「海外ニュース Dunia Dalam Berita」（毎日夜9:00～30）¹⁶⁾とスポーツ番組を見ることが多い。クトプラの中継も暇な時には見るが、それほど好きではない。ジャカルタの騒乱もテレビのニュースで見ているし、スハルト辞任についても夜のニュース番組で知ったと答えていた（それまでは人から聞かなかった）。辞任のニュースを見たとき、興奮したと答えている。また、当時の状況について、「（民衆の）闘争の結果、辞任した。改革はともに支持するが、騒乱を起こすのは支持しない。Karena perjuangan, dia mundur. Reformasi yang sebetulnya saya ikut dukung. Tapi, buat kerusuhan, memang tidak dukung.」と自分の意見を述べていた。

（4）壮年女性（40～59歳，小学校卒業以上の学歴）

（4－1）ワルジラー

41歳の農民で、夫は賃労働者（buruh）として働いている。中学校を卒業している。高校生の子供は他の村のプサントレン（イスラム寄宿塾）にいますので、9歳の子供と3人で暮らしている。家にテレビはなく、近所の家のテレビでニュースとクトプラを見ている。ジャカルタの騒乱もスハルト辞任も夜のニュース（TVRI）で見えて知った。「改革賛成 Pro-reformasi」と述べている。

（5）青年男性（20～39歳，高校卒業以上の学歴）

（5－1）バンバン

33歳の既婚者で、高校を卒業し賃労働者として働いている。4歳の娘がいて、父親（村役人）と棟続きの家で生活している。マス・メディアとの接触度は高く、新聞（Kedaulatan Rakyat）だけでなく、女性雑誌（Femina）もよく読んでいる。父親が1年前に人から貰った白黒テレビがあり、そのテレビをよく見ている。よく見る番組として香港のクンフー映画（Indosiar）が

ある。ジャカルタの騒乱とスハルト辞任のニュースもテレビで見て知っている。

(5-2) マルヨノ

25歳の独身で親と同居している。工業高校を卒業し、建設労働者として働いている。父親は水田を所有し、この地域では比較的裕福である。父親が2年前に買った白黒テレビ(Rp 180,000)があり、1日に1時間位テレビを見ている。「リプタン6」や「インドネシアひとめぐり Seputar Indonesia」(RCTI 毎日午後6:30~7:00)というニュース番組、および映画(アメリカ映画とインドネシア映画)をよく見ている。ジャカルタの騒乱とスハルト辞任のニュースもテレビで見て知っている。

(6) 青年女性(20~39歳, 中学卒業以上の学歴)

(6-1) プリヤンティニ

31歳で、幼稚園の保母をしている。高校を卒業している。宗教裁判所に勤めている夫と、5歳の娘と3人で暮らしている。小さなラジオがあったが、壊れていて聴いていない。半年前に白黒テレビ(Rp 160,000)を買った(その前は近所でよくテレビを見ていた)。夕方から夜にかけて1日に3~4時間くらいテレビを見ている。ニュース番組とシネトロンをよく見ていて、とくにシネトロンでは、「妻たち Istri-istri」(RCTI 日曜夜7:30~8:30)と「母の涙 Air Mata Ibu」(RCTI 月曜夜7:30~8:30)が好きである。ジャカルタの騒乱については「リプタン6」で見ていて、「かわいそう。私は改革賛成派だが、平和な改革を望んでいる。Sayang. Saya pro-reformasi, tapi maunya reformasi damai.」と、テレビで見た事件についての印象を語っている。また、スハルト辞任は市場に行っていて駐車場で辞任の報を聞き、その後、「昼のリプタン6 Liputan 6 Siang」(SCTV 毎日午後0:00~1:00)で辞任の映像を見たという。

(6-2) ヌルヤンティ

28歳で、夫は(1-1)カルトパウィロの息子である。高校(教員養成高校)3年で中退している。家内工業で夫とともにパンケーキ作りをしている。

ジャワ村落社会のテレビ視聴者

夫の父の屋敷地内に家があり、5歳の娘と3人で暮らしている。ジョクジャカルタに行った時に、新聞（地方紙）を買って読むことがある。また、家にあるラジオで宗教講話と音楽番組をよく聴いている。テレビは家にはないが、近くにある実家（隣接する隣組）でテレビ番組をしばしば見ている。夕方6時台は、「リプタン6」や「インドネシアひとめぐり」、続いてTVRIの国内ニュース番組（7:00～30）までニュース番組をよく見ている。この他、シネトロンとアニメ番組なども好きである。ジャカルタの騒乱については、テレビのニュース番組で見て知ったという。テレビの他に、新聞と雑誌でも関連する記事を読んでいる。また、スハルト辞任についてもテレビで見て知っていた。

6 マス・メディアと社会変化

上で紹介した11人の事例から言えることは、ある意味で当たり前すぎ、世界中のどこでも認められる近代化のプロセスである。明らかに若い世代ほどマス・メディア、とくにテレビを通して外の世界から得る情報の受容が顕著になっている。逆に高齢になればなるほど、マス・メディアが情報を伝える媒体として機能していないといえる。マス・メディアの使用言語がインドネシア語である以上、ジャワ語が母語であり日常の使用言語となっている高齢のジャワ人にとって、マス・メディアを通して情報を得ることは困難なのである。ここで取り上げた2人の高齢女性は少し極端な例かもしれないが、高齢層の住民はおもにジャワ語を中心とする世界で生活している。今日の農村社会に確実に存在するテレビは、一般的に言って、高齢者にとって村の外の世界、とくに国民国家インドネシアの首都ジャカルタから送られてくる情報を伝える媒体とはなっていない。近隣に住む家族や知人が媒介者となってジャワ語で伝えられる口頭の情報によってしか、インドネシアの国政上、重要なニュースが伝えられなかったのである。かれらは口伝えのコミュニケーションを中心とするジャワ的なネットワークのなかで今も生きている人々といえる。もちろん、60歳以上の高齢者といっても例外はあり、ある60歳と61歳

の男性はそれぞれ中学卒と高校卒の学歴をもち（二人とも元公務員で年金受給者）、テレビを通してインドネシアの政治動向を知っているのである。とはいえ、60歳以上の住民の多くは前章で紹介したような人々である。

インドネシア独立以降の近代化の過程で、教育水準の向上が確実に進んでいる。ジャカルタなど都市部と比べた場合、その進展は遅れているとはいえ、ジャワの農村社会においても確実に住民の教育水準は上がっている。調査村の教育水準の向上については、2章で具体的に数字を挙げて説明した通りである。学校教育の量的拡大と明らかに結びついているのは、インドネシア語の普及であり、そしてインドネシア語を使用言語とするマス・メディア（新聞雑誌のような活字メディアとテレビなど映像メディア）に関して、接触の頻度の量的・質的な拡大である。調査結果から若い世代ほど教育水準が高くなる傾向があり、そしてより決定的なことは、教育水準が高い住民ほど、テレビに限らず新聞・雑誌を通して様々な情報を獲得しているし、とうぜんその理解度も高いものとなる。その結果、国政上の重大事件に関する調査者の質問に対して、「改革 reformasi」など当時のメディアに頻出した言葉を織り込みながら、感想を述べていたのである。また、KKN（Korupsi, Kolusi, Nepotisme の略で、汚職、癒着、縁故主義を指す）が、スハルト大統領と彼が作りあげた「新体制」を批判する決まり文句としてインドネシア各地で使われ、当然マスコミでも頻出していた。それを村外の人間とあまり接触することなく村のなかで暮らしている住民（壮年層・青年層）であっても、おもにテレビを通して知り、自分の発言のなかに取り込んでいた。このジャワの農村においても、彼らにとってテレビは外の世界、とくにインドネシアという国民国家レベルで起きる重大な出来事を伝えるメディアとして機能していたことは明らかである。

ここで述べたことは、マス・コミュニケーション研究で言われる「知識格差 (knowledge gap)」仮説¹⁷⁾ [Tichenor et al. 1970, 児島 1993: 145-161 参照] の妥当性のある意味で示すものといえる。本来この仮説は社会的地位の上下を問題にしているが、それを学歴と年齢の違いと読み替えると、ジャワ

ジャワ村落社会のテレビ視聴者

村落の状況に当てはめることができる。国内ニュースに関するテレビ報道は、学歴の高い若年層と学歴の低い高齢層の間の知識格差を縮めるものではなく、逆に拡大させるものであるということが出来る。

7 シネトロンにハマる娘たち

スハルト大統領の「新体制」下で進んだ経済発展のなかで、ジャワの農村部でも、高校卒以上の学歴をもちながら、とくに仕事を持たずに（または1997年以来の経済危機で失業し）ブラブラと暮らしている若者が目立つようになってきた¹⁸⁾。親の経済収入もある程度高く、テレビを所有し、また子供にバイクを買い与える余裕がある家族の子供である。調査地のなかで、このような若者はごく一部の少数派であるという訳ではない。彼らが農村の生活のなかに、村の外から入ってくる情報に大きく依存する「都市的なライフスタイル」を持ち込んでいるのである。1999年のインドネシア総選挙の時に村における選挙キャンペーンに積極的に参加したのは、この層の青年男子であった。そういう若者たちの一日の行動にテレビが不可欠なメディアとして存在するのである。このように農業労働の桎梏からまぬがれ、時間を持て余した若者たちに注目することによって、村で起きている社会変化の一面を明らかにしたいと思う。ここでは、2人の青年女性¹⁹⁾を取り上げて、彼女らの日常生活のなかで、毎日ゴールデンアワーに放送される人気シネトロン（連続テレビドラマ）がどういう意味をもっているか考えてみたい。4章ですでに紹介したように、シネトロンには村の現実の生活とはまったく関わりのない都会の豪華で現実性を欠いた世界が描かれていて、20代の未婚女性から40代の既婚女性までシネトロンの人気は高い。

（1）ハルヤティ

19歳の未婚女性で高校卒業後、職に就くことはなく、家族（両親と3人の兄弟姉妹）とともに暮らしている。父親（44歳）は小学校卒の農民で、近所で働き者として知られている。母親（38歳）は、毎朝自転車で市場に行商（bakul）に出ている。村の基準では経済的に豊かな世帯であり、また父親

の兄弟の援助で子供たちは進学していた。兄は高校卒業後、家で農業を手伝うこともなく、父親に買ってもらったバイクを乗り回し、姉はジョクジャカルタの私立大学に通っている。近所の人の言葉では、父親がハルヤティを甘やかしていて、彼女もほとんど家の手伝いはしていない。1996年頃父親が白黒テレビ（Rp 180,000）を買ったが、その以前は近くの地区長（Ketua Dusun）の家で彼女はテレビを見ていた。

ハルヤティは昼寝・休息の時間（12時から4時半まで）とコーラン唱和会（pengajian）に出かける時（6時頃に出て8時に帰宅）を除いて、朝9時から夜9時までずっとテレビを楽しんでいる。とくに8時台は毎日決まったシネトロン（連続テレビドラマ）を欠かさず見ている。彼女が好きなシネトロンは、第一に「愛されて Tersayang」²⁰⁾（SCTV 水曜夜7:30～8:30）、二番目は「私の宝石 Permataku」（RCTI 月曜夜8:00～9:00）、三番目は「賞賛されて」である。シネトロンで展開される都会の豪勢な生活について質問すると、「うらやましい。望んでも、私の生活はこんなものだ。Kita iri juga. Kalau ingin juga, kemampuannya begini.」と答えていた。つまり、テレビに映し出される生活を望んでも手に届かないものというイメージで捉えている。

父親（44歳）は、「リプタン6」とTVRIのニュースのニュース番組を見て、毎日のトップニュースについて詳しく知っている。1999年の調査時点では、アチェやアンボンで起きている紛争の動きに関心を持っていた。ちなみに、娘のハルヤティはニュースをまったく見ないという。ニュース番組の他は、ジャワの芸能、クトプラとワヤンを見るのが好きだが、子供がクトプラを好きではなくシネトロンを見たがるので、全部ゆっくりと見ることはできない。チャンネル権は父親ではなく子供たちがもっている。一方、母親は毎日の仕事が忙しく疲れるので、テレビを見ることはあまりない。

（2）シティ

19歳の未婚女性で、両親と弟、妹の計5人で暮らしている。高校卒業後、半年前からバイクでジョクジャカルタ市内の会計専門学校に通っている（近所の噂では、勉強しないで遊んでいるだけ）。父親は農民で、この地区の地

ジャワ村落社会のテレビ視聴者

区長（Ketua Dusun）を勤めている。そのため、妻ともども様々な仕事を抱えて日々忙しくしている。彼は2年前にテレビを購入したが、あまり落ち着いてテレビを見る時間はない。

シティは帰宅した後、夜7時半から9時頃までシネトロンを見ている。ハルヤティと同様に毎晩見るシネトロンが決まっている。シネトロンのなかでは恋愛ドラマが好きで、一位が「愛されて」である。若者の生活と彼らが抱える問題が描かれているから、このドラマがとくに好きだという。二位は「賞賛されて」である。シネトロンで展開される都会の豪勢な生活について質問すると、ハルヤティと同様に、憧れは抱いているが、現状は「こんなものだ。Begini saja」と、ひじょうにさめた目で捉えている。首都ジャカルタを舞台としたドラマをしょっちゅう見ている、それがジャカルタに対する憧れに直結するわけではなく、私の質問にたいして、もちろん村の外に出たい気持ちはあるが、ジャカルタには行きたくないと答えていた。ジャカルタよりも、父の兄弟がたくさんいるスマトラに行きたいと思っている。シティは若い女性向けの雑誌（Aneka, Anita など）を読むのが好きで、この村の女性としては珍しく、小説を書いて雑誌に投稿したことがある。

彼女の母親（38歳）は暇な時にテレビを見るだけで、週末は忙しくてまったくテレビを見ていない。テレビを見るときは娘と同じように、「愛されて」や「賞賛されて」のようなシネトロンを楽しんでいる。本人も筋はある程度知っているが、時々娘に話の筋を聞きながら見ている。

ここで紹介した二人の娘はこの村の同年代の女性のなかでは例外的である。とくにハルヤティの怠惰な生活態度は、近所の人から冷たい目で見られている。他の家庭では、日中、娘たちは仕事や家事の手伝いに忙しく、その合間にテレビを見る程度である。とはいえ、ハルヤティがまったく村の規範に反した生活を送っているわけではない。彼女は、近所の友達とともに欠かすことなくコーラン唱和会に参加している。この村で人々の生活を律しているイスラムの生活リズムと、テレビ番組表に象徴されるような「近代的」な時間

が、彼女の生活世界のなかでうまくバランスをとって共存している。このことは、彼女に限らず、村におけるテレビ視聴一般について当てはまり、テレビはすでに村人の生活時間のなかに定着していると言える。テレビを見ると、イスラムで定められている1日5回の礼拝（sholat）が両立していて、仕事が終わった村人がよく見る6時台のニュース番組の前後に、日没後（マグリブ）の礼拝と夜（イシャー）の礼拝を行っている²¹⁾。イスラムの礼拝だけでなく、村人の規範となっているその他の諸活動を妨げることなく、テレビ視聴が1日の生活リズムに組み込まれている。

ハルヤティとシティのシネトロンへの執着は、二人が生活する農村の日常生活をみていると、ひじょうに奇妙なものに思える。テレビ画面に映し出される世界は、二人の言葉が示すように彼女たちにとって身近な憧れとはまったく言えない、はるか遠く離れた出来事である。テレビは農村世界のなかに、日常生活から隔絶した「文化的に閉ざされた小世界」といえるようなものを作り出している。プルウォサリ村には村人の日常生活を規定する規範があり、そして、以前よりは緩やかになったとはいえ、それは若い女性の日常をある程度束縛するものである。テレビが映し出す現実離れした（都会で生活する一般の人にとっても現実から遠くはなれた）「世界」は、村における現実の営みのなかに、微妙なバランスをとって、はめ込まれている。それが現代ジャワの農村生活の一面なのである。

結 び

本稿で描き出したのは、プルウォサリ村の生活の一断面に過ぎない。テレビ視聴に焦点を絞ったとはいえ、テレビの見方、テレビ番組の受け取り方をとっても、ここで紹介したのはほんの数例に過ぎない。村にはもっと多様なテレビ視聴の実態がある。とはいえ、テレビという「近代的な」メディアに注目することで、静態的な「伝統社会」の記述という枠組みでは収めきれない、現代ジャワ社会のもつ複雑で、入り組んだ様々な側面の一端を描くことはできたと思う。テレビ視聴の研究は現代の村落生活を描くための一つの有

効な手法である。

本稿で取り上げたように、プルウォサリ村におけるテレビという存在の大きさは明白である。ただし、テレビが90年代に村に普及し、それだけが村社会における情報伝達（とくに外の世界から送られてくる情報の流れ）に直接的な変化をもたらしたとは考えていない。インドネシア独立以降の村落社会における、学校教育の浸透（同時にインドネシア語という国語の普及）を含む近代化という急激かつ大きな社会変化のなかで、外世界との情報伝達に関して世代差という形で単純化されるような住民間の多様性が生まれたのである。ジャワ語しか知らない高齢者にとって、テレビは彼らにとってもともと身近であったジャワ語で演じられる芸能を見て楽しむためのメディアでしかないのである。一方、より若い世代を中心とするインドネシア語使用者にとって、80年代以降インドネシアの経済発展のなかで身近な存在となったテレビは、村と外の社会をつなぐメディアとして重要な意味を持っている。テレビの浸透が直接的に何かを変えたというよりも、テレビの存在はすでに変化した社会的な枠組みをさらにいっそう強化するような形で村落社会に影響を与えたといえる。

テレビを日常よく見る村人のなかでも、テレビから国内政治の動向に関して情報を得ようとニュース番組を熱心に見る壮年男性と、シネトロンにハマった若い女性とでは、テレビを見る意味がまったく違っている。テレビに注目することで、このような村人の間に存在する多様性を見いだすことができる。しかし、プルウォサリ村において、これらの住民はお互いの間で密接なコミュニケーションをもちつつ、地域社会の生活を営んでいる。このように、「伝統」と「近代」、そしてローカルとナショナルが複雑に錯綜しているのが、現代ジャワ社会の姿なのである。

注

- 1) 以下に、人類学者による代表的なメディア研究を紹介しよう。オセアニアでは、パプア・ニューギニアについて Kulick and Willson [2002]、オーストラリ

アの先住民について Michaels [2002], 中南米では、ベリーズについて Wilk [2002], ブラジルについて Kottak [1990], アフリカでは、ナイジェリアについて Larkin [1997], エジプトについて Abu-Lughod [1995, 1999], 最後にアジアでは、インドについて Mankekar [1993], 中国に関して Rofel [1994], マレーシアについて Postill [forthcoming], インドネシアについて Hobart [1999] と, Hughes-Freeland [1998] を挙げることができる。

- 2) カルダローラは、南カリマンタン州北フル・スンガイ県でテレビの受容に関する調査（1988～89年）を実施した。調査地域は州都バンジャルマシムから約200km離れた地方（小都市と農村）であり、テレビを持つ世帯の割合は約25%である。この調査では、テレビ番組（TVRI）を見るのが一般的になるとともに国民文化が広がりをもたせるようになり、一方、独自の地方文化の衰退が進んでいったことが指摘されている [Caldarola 1990]。テレビ視聴に関する量的調査はいくつかあるが [たとえば Chu et al. 1991, Sendjaja 1988], 地域社会におけるテレビ視聴の質的調査はまだあまり試みられていない。
- 3) 本稿は1998年8月7日～9月11日及び1999年8月4日～8月24日にインドネシアのジョクジャカルタ特別区バントウル県で行なわれた調査に基づいている。1998年度の調査はサントリー文化財団研究助成「インドネシアへの大衆文化の浸透過程に関する調査研究——テレビ番組の実態を中心に」（研究代表者：慶應義塾大学・倉沢愛子）、1999年度の調査は国際学術研究「開発体制下のインドネシア村落における情報伝達と動員に関する調査研究」（課題番号：11691097, 研究代表者：慶應義塾大学・倉沢愛子）の研究助成を受けて実施された。バントウル県における調査は、倉沢愛子氏（慶應義塾大学経済学部）及び内藤耕氏（東海大学文学部）と筆者との共同研究という形で実施された。ここで使われている調査データは上に記した共同研究の成果の一部であるが、本稿の文責はもちろん筆者にある。本稿は、平成11年度・平成12年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告「開発体制下のインドネシア村落における情報伝達と動員に関する調査研究」（平成13年4月提出）の一部をなす拙稿「第4章 マスメディアの浸透とその影響力」、及び日本民族学会研究発表「ジャワ村落のテレビ視聴者」（2000年5月20日一橋大学）と、同じく日本民族学会研究発表「ジャワ村落のテレビ視聴者（2）」（2001年5月19日神戸大学）を基にしている。共同研究者である倉沢愛子氏・内藤耕氏、そして民族学会での筆者の発表に対してコメントをしていただいた方々に、深い感謝の意を表したい。また、インドネシアでの調査はインドネシア科学院（LIPI）とガジャマダ大学

ジャワ村落社会のテレビ視聴者

(UGM) の協力によって可能になった。また、本学の海外研修制度によって 2001年から2002年にかけて行ったオランダ・レイデンにおける研究成果も本稿のなかに取り込まれている。英文要旨は本学文学部の Philip Billingsley 教授に目を通していただいた。以上、関係する諸機関および諸氏にこの場を借りて感謝の言葉を述べたい。

- 4) ここで集落とは、地理的に住居が密集した集落を指している。この村では、行政単位である地区 (dusun) のなかに複数の集落が含まれている。ジェイが「村落共同体」(a village community) と呼ぶ、明確に区切られた社会単位である [Jay 1969: 290]。
- 5) 調査対象の世帯で、村外に出て行った子供（一時的な出稼ぎと就学も含む）の割合は、40.4%（228人中、92人）に達する。また、調査時点で、5人が海外で働いていた。
- 6) 調査においては、各世帯の世帯主またはその妻を対象にして、調査票によるアンケート調査を実施した。本稿で紹介しているマス・メディアとの接触状況に関するデータは、1998年の調査に基づくものである。また、学歴などについては、新たに1999年の調査データを加えて再集計している。
- 7) ナフダトゥル・ウラマ (NU) は1926年に結成されたイスラム団体である。1999年にNUの当時の指導者アブドゥルラフマン・ワヒッド（後に第4代大統領に選出）が中心になって民族覚醒党 (Partai Kebangkitan Bangsa) が結成され、同年の総選挙において全国で第3位の投票数を獲得した。プルウォサリ村で民族覚醒党は圧倒的な勝利を収め（約60%）、とくにP地区では有効投票416票のなかの358票を得た（国会議員選挙）。
- 8) インドネシアの現行の教育制度は、日本と同じく6-3-3制である。つまり、小学校6年（原則として7歳で入学）、中学校3年、高校3年である。独立以降長く小学校のみが義務教育であったが、1994年から中学校も義務教育期間に含まれるようになった。
- 9) スハルト大統領退陣以降に、さらに5局 (Metro TV, G-TV, Trans TV, TV7, La-TV) が開局している。
- 10) インドネシアにおいて、テレビの普及は1990年代に入って目覚ましいものがある。テレビ受信機は、1985年には人口1000人当たり38台だったが、1990年には57台、1997年には、68台と増加している [総務省統計局・統計研修所編 2002: 367]。
- 11) ワヤンはジャワの宮廷より発した芸能で、その代表は影絵芝居 (ワヤン・ク

リット)である。題材は、インドから伝わった『ラーマーヤナ』と『マハーバータ』からとったものが多い。

- 12) 「クトプラは、歌あり、踊りあり、笑いあり、そしてインドネシアで流行しているカンフー風護身術やアクロバットなどの見せ場も豊富に盛り込んだジャワの総合芸術というべき大衆演劇である。」[風間 1994: 57] 近年、クトプラのテレビ中継がジャワ人の間で人気を集めている。
- 13) インドネシアの人気テレビドラマを数多く製作しているインド系プロデューサー Raam Punjabi について、小池 [2001: 133-137] で紹介している。
- 14) 以下、本稿に登場する名前は、もちろんすべて仮名である。
- 15) 調査当時のルピアのレートは変動が激しかったが、いちおうの目安として 1 円 = Rp 80 で計算すると、この白黒テレビの価格は約 1438 円になる。
- 16) TVRI のニュース番組 (夜 7:00~30 の国内ニュースと 9:00~30 の海外ニュース) は当時、他のすべての民放で同時時間帯に放送されていた。
- 17) ティッチナー等によると、「知識格差仮説」は次のようになる。「マスメディアによる情報が社会システムに広まるとともに、社会経済的に高い地位にある住民層は、低い階層よりも早く情報を獲得する傾向があり、その結果、二つの層の間の知識格差は縮小するよりも拡大する傾向がある」[Ticheler et al. 1970: 159-160]。ちなみに、彼らは、テレビによる学習にこの仮説を適用することについて否定的である。
- 18) 「新体制」が農村にもたらしたモダニティについては、西ジャワの農村に関してアントロフによる興味深いモノグラフがある [Antlöv 1995, 1999]。
- 19) 1999 年 8 月にそれぞれの家でインタビューを行った。
- 20) 「愛されて」は、「賞賛されて」よりも若い視聴者層を狙ったテレビドラマで、ジャカルタに住む大学生の恋愛が描かれている。このドラマは、ブルウォサリ村でも、青年女性のあいだで高い人気をほこっている。
- 21) 1 日 5 回の礼拝は、ムスリムが実践すべき五行の一つである [大塚 2000: 13-15]。毎日の礼拝時間は太陽の動きによって厳密に決まっているが、実際には、人々は必ずしも決められた時間通りに礼拝を行うわけではない。

参考文献

- 伊藤俊治・港千尋編, 1999, 『映像人類学の冒険』せりか書房
大塚和夫, 2000, 『イスラーム的——世界化時代の中で』日本放送出版協会
風間純子, 1994, 『ジャワの音風景』めこん

- 小池誠, 2001, 「南アジア系移民とインドネシア国民文化の形成——インド映画からテレビドラマへ」 南埜猛・関口真理・澤宗則編『越境する南アジア系移民——ホスト社会とのかかわり』(Discussion Paper No. 13) 文部省科学研究費・特定領域研究(A)「南アジアの構造変動とネットワーク」
- 児島和人, 1993, 『マス・コミュニケーション受容理論の展開』東京大学出版会
- 総務省統計局・統計研修所編, 2002, 『世界の統計2002年版』財務省印刷局
- Abu-Lughod, Lila, 1995, The Objects of Soap Opera: Egyptian Television and the Cultural Politics of Modernity, in Miller, Daniel (ed.), *Worlds Apart: Modernity through the Prism of the Local*, London: Routledge.
- Abu-Lughod, L., 1999, The Interpretation of Culture(s) after Television, in Ortner, Sherry B. (ed.), *The Fate of "Culture": Geertz and beyond*, Berkeley: University of California Press.
- Antlöv, Hans, 1995, *Exemplary Centre, Administrative Periphery: Rural Leadership and the New Order in Java*, Richmond: Curzon.
- Antlöv, Hans, 1999, The New Rich and Cultural Tensions in Rural Indonesia, in Pinches, Michael (ed.), *Culture and Privilege in Capitalist Asia*, London: Routledge.
- Askew, Kelly and Richard R. Wilk (eds), 2002, *The Anthropology of Media: A Reader*, Malden: Blackwell.
- Biro Pusat Statistik 1995a, *Penduduk Indonesia: Hasil Survei Penduduk antar Sensus 1995 Seri: S2*. Jakarta: Biro Pusat Statistik.
- Biro Pusat Statistik, 1995b, *Penduduk Daerah Istimewa Yogyakarta: Hasil Survei Penduduk antar Sensus 1995 Seri: S2. 12*, Jakarta: Biro Pusat Statistik.
- Caldarola, Victor J., 1990, Reception as Cultural Experience: Visual Mass Media and Reception Practices in Outer Indonesia, Ph. D. Thesis, University of Pennsylvania.
- Chu, Godwin C., Alfian, and Wilbur Schramm, 1991, *Social Impact of Satellite Television in Rural Indonesia*, Singapore: Asian Mass Communication Research and Information Centre.
- Hobart, Mark, 1999, The End of the World News: Articulating Television in Bali, in Rubinstein, Raechelle & Linda H. Connor (eds), *Staying Local in the Global Village: Bali in the twentieth Century*, Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Hughes-Freeland, Felicia, 1998, From Temple to Television: The Balinese Case, Hughes-Freeland, Felicia and Mary M. Crain (eds), *Recasting Ritual: Performance*,

- Media, Identity*, London: Routledge.
- Inda, Jonathan Xavier and Renato Rosaldo (eds), 2002, *The Anthropology of Globalization: a Reader*, Malden: Blackwell.
- Jay, R. R., 1969, *Javanese Villagers: Social Relations in Rural Modjokuto*. Cambridge: The MIT Press.
- Johnson, K., 2000, *Television and Social Change in Rural India*. New Delhi: Sage.
- Kitley, Philip, 2000, *Television, Nation, and Culture in Indonesia*, Athens: Ohio University Center for International Studies.
- Kottak, Conrad, 1990, *Prime-time Society: An Anthropological Analysis of Television and Culture*, Belmont: Wadsworth.
- Kulick, Don and Margaret Willson, 2002, Rambo's Wife Saves the Day: Subjecting the Gaze and Subverting the Narrative in a Papua New Guinea Swamp, in Askew, Kelly and Richard R. Wilk (eds), 2002.
- Larkin, Brian, 1997, Indian Films and Nigerian Lovers: Media and the Creation of Parallel Modernities, *Africa* 67-3: 406-440.
- Mankekar, Purnima, 1993, National Texts and Gendered Lives: An Ethnography of Television Viewers in a North Indian City, *American Ethnologist* 20-3: 543-563.
- McQuail, Denis, 2000, *McQuail's Mass Communication Theory* (4th Edition), London: Sage.
- Michaels, Eric, 2002, Hollywood Iconography: A Warlpiri Reading, in Inda, Jonathan Xavier and Renato Rosaldo (eds), 2002.
- Oey-Gardiner, M., 1997, Educational Developments, Achievements and Challenges, in G. W. Jones and T. H. Hull (eds), *Indonesia Assessment: Population and Human Resources*, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- Postill, John, forthcoming, Visual Anthropology and the Cultural Epidemics of Institutions.
- Rofel, Lisa, 1994, Yearings: Television Love and Melodramatic Politics in Contemporary China, *American Ethnologist* 21-4: 700-722.
- Sen, Krishna and David T. Hill, 2000, *Media, Culture and Politics in Indonesia*, South Melbourne: Oxford University Press.
- Sendjaja, Sasa Djuarsa, 1988, Social Reality and Television News in Indonesia: An Investigation of Young Indonesian's Perception of the Television Portrayals of Three Development Program Issues, Ph. D. Thesis, Ohio State University.

ジャワ村落社会のテレビ視聴者

- Spitulnik, Debra, 1993, Anthropology and Mass Media, *Annual Review of Anthropology* 22: 293-315.
- Tichenor, P. J., G. A. Donohue & C. N. Olien, 1970, Mass Media Flow and Differential Growth in Knowledge, *Public Opinion Quarterly* 34: 159-170.
- Wilk, Richard R., 2002, “It’s Destroying a Whole Generation”: Television and Moral Discourse in Belize, in Askew, Kelly and Richard R. Wilk (eds), 2002.

Television Audience in a Javanese Village: From the Viewpoint of Media Anthropology

Makoto KOIKE

The aim of this paper is to explore the reception of television in a changing Javanese rural society. I will discuss the role of television in the context of the fundamental and irreversible socio-cultural changes that have occurred in a village of Purwosari (a pseudonym). This process is usually called modernization. After the establishment of Suharto's New Order, tightly knit local communities were increasingly integrated into a larger national one, and usage of the national language spread in tandem with the progress of national education. Under the slogan of "development and progress", various governmental programmes were accomplished in rural areas, in which an expanding group of villagers came to enjoy improved living standards. In this village electric power has been available since 1988 and television has since spread rapidly. What are the influences of this newly spread medium on the rural society? This is an important question anthropologists should take up.

We find a variety of audiences in Purwosari; for example, elders who cannot understand the news programmes and enjoy only Javanese folk performances, middle-aged men who express their opinions relying on the information they acquire in the news programmes, and young women who are addicted to sinetron (television drama). Anthropologists can take various approaches to this multifaceted rural community. I think focusing on television viewing is one way which enables us to highlight a mixture of the traditional and modern, and the local and national that we find in a Javanese village today.